

『狭衣物語』の嵯峨院とその皇女たち： 養女論の一環として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1373

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



『狭衣物語』の嵯峨院とその皇女たち

——養女論の一環として——

倉 田 実

はじめに

『狭衣物語』には、多様な養子女関係が設定されているが、前稿までに、源氏の宮・今姫君・女二の宮所生の若宮・飛鳥井の姫君などにおける養子女性を考えてきた。⁽¹⁾ 本稿では、これらを受けて、後一条帝入内の際して堀川関白の養女となつた嵯峨院皇太后宮腹の女一の宮を考えることになるが、その前に、他の同母姉妹、女二の宮（入道の宮）や女三の宮なども視野に入れ、嵯峨院（在位中もこの呼称を使用する）の問題からまず検討していきたい。なお、この小論の三節は、本誌前号の拙稿と重なる部分があることをあらかじめ了解願いたい。論述の都合である。また、女二の宮については、本誌に検討を加えた拙著を参照されたい。⁽²⁾ 本文は、これまで通り集成本を使用するが、表記は私に換えた。

一 嵯峨院の皇女たち

『狭衣物語』は皇女たちの物語という側面を保持している。狭衣とかかわった主要な五人の女性のうち、源氏の宮・女二の宮・一品の宮は素姓として皇女である。また、宮の姫君は王女であった。飛鳥井の君だけは除外されるが、さらに女一の宮と女三の宮も物語展開に絡んで、皇女たちの一員でいる。皇女や王女たちが登場人物として選択され、その生き様を語る事が主題化されていたのは確かであろう。物語成立の場が、祿子内親王サロンであったことと大きく関係しているのは間違いないさそうだが、この点は別途考えなくてはならない。ここでは、皇女たちの物語という背景のなかで、皇太后宮腹の三人の皇女を対象化することで満足したい。

三人の皇女はいずれも、父嵯峨院の意向によって、狭衣への降嫁ということとその処遇が決定されようとしながら、いずれも挫折しているところに特質がある。女二の宮降嫁は、密通事件の被害者になって出家に至り挫折している。また、その代替として、女三の宮降嫁も決定されなかったが、齋宮とならざるを得ない展開において頓挫している。女一の宮は、齋院退下後に、やはり狭衣への降嫁が思案されたが、後一条帝入内という形で決着している。嵯峨院の、三人の皇女に対する処遇案は、いずれも狭衣への降嫁が庶幾されながら、すべて挫折しているのである。特異なありようというべきであり、その意義を考えなくてはならないが、まず、三人の皇女が物語当初からその存在が提示されていたことを確認してきたい。

嵯峨院の皇女が初めて提示されたのは、狭衣の天稚御子降臨を呼び起こした段になる。吹奏を躊躇する狭衣は次のように思っていたが、ここに皇女たちの存在が提示されていた。

皇太后宮の姫宮たちなどの、上の御局におはしますころにて、「心にくき御あたりに、何事も残りなく聞かれたてまつらじ」と思ふかたさへいとどしきなるべし。

ここで、嵯峨院の皇女は、皇太后宮腹に複数いることが提示されているのだが、さらに狭衣の笛の奇瑞に対する恩賞と、地上に引き留める策として、嵯峨院が女二の宮降嫁に想到する時、女一の宮のことも提示されていた。

皇太后宮の女二の宮の御容貌、心ばせ、ことわりも過ぎておはしますを、いみじうかなしきものにしたてまつらせたまひけり。一の宮はこのごろ齋院にておはします。

(巻一・34頁)

三人の皇女のうち、早々と姉二人が紹介されたことになる。嵯峨院は、女二の宮の「御容貌、心ばせ」から、狭衣への降嫁に想到していたが、女一の宮でないことも明らかになっている。「一の宮はこのごろ齋院にておはします」ということで、女一の宮は齋院になっているのであり、必然的に結婚問題などは棚上げされて、この時点では狭衣の配偶候補者から除外されている。しかし、退下後の将来に、その所遇が問題にされるであろうことは予測できよう。女二の宮は、さらに「二の宮のこのごろ盛りにととのひたまへる御有様」(巻一・35頁)とされ、結婚適齢期であるとも語られているが、これによって、女三の宮はまだその年齢に達していないことも暗示されている。

この女三の宮の存在が知られるのは、巻二になってからである。狭衣が弘徽殿に忍びこみ女二の宮と密通に及ぶ前の場面であり、狭衣の視線で捉えられている。

あなたは宮たちの御方なるべし、帳の前に二所臥したまへり。ほのかなる灯の影に、いづれかいづれともとみに分れたまはず。

(巻二・137頁)

ここに「宮たち」とあるが、女一の宮は齋院なので除外され、女二の宮ともう一人の誰かになる。それが女三の宮であることは、この後すぐさま示されている。女房たちが、天稚御子降臨の様子を中務の宮の姫君が絵に描いたと噂しているのを聞いて、女三の宮が反応したからである。

この三の宮にやと見えたまふ、少し起き上りて、「その絵はなど見せぬ。心憂かりけり」など恨みたまふ気色、幼びてうつくしげに見えたまふ。

(巻二・138頁)

狭衣は、女三の宮の様子を「幼びてうつくしげに」と見ているので、結婚適齢期とまでは言えないような年齢となる。だから、狭衣は女三の宮との密通に及ばなかったことにもなるが、とにかく嵯峨院の皇女たちは、女三の宮の紹介が年立で一年遅れたとはいえ、当初からその存在が知られるのであり、物語展開に絡むことが予想されるのである。

皇太后宮腹の三人の皇女のうち、女二の宮が主要な登場人物となって物語の終末まで語り続けられている。しかし、女二の宮の物語展開と表裏する形で、女一の宮と女三の宮もかかわっているものであり、同母皇女としてのこの三人を同時に捉える視点が必要であろう。そして、物語の始発早々に設定されたことにおいて、皇女の処遇はどうあるべきかも潜められた主題性として存在していたと言えるよう。

二 嵯峨院像

嵯峨院は三人の皇女に対する処遇として常に狭衣への降嫁に想到していくが、なぜ狭衣へなのかを確認しておきたい。嵯峨院の意向は、物語展開において、重要な働きをしているからである。

まず指摘できることは、嵯峨院の狭衣鼯貞という点である。嵯峨院は、狭衣の美質に絶えず注目し、引き立てることに心を用いている。そもそも狭衣を二位中将にしたのも嵯峨院であった。

このごろ、御年二十にいま二つばかりや足りたまはざらむ。二位中将とぞ聞こゆめる。∴おしなべての殿上人にて交らひたまはむが心苦しさに、内裏の上などの、せちになさせたまへるなりけり。

(卷一・14頁)

狭衣を秘蔵したい両親の意向を忖度せず、嵯峨院は二位中将に任官させているが、その理由は、理想的な貴公子だからというだけではなさそうである。物語で読み取れるのは、嵯峨院が狭衣の理想的な美質に注目しているという点だけであり、この点は多様に語り続けられている。しかし、鼯貞にする、隠された理由もあるようである。それは、嵯峨院が堀川

関白の弟であったという点に求められるように思える。この兄弟は、物語冒頭部で次のように紹介されていた。

このころ、堀川の大臣と聞こえて関白したまふは、一条院、当帝（嵯峨院）などの一つ后腹の二の御子ぞかし。母后もうち続き帝の御筋にて、いづ方につけても、おしなべて同じ大臣と聞こえさするもいとかたじけなき御身の程なれど、何の罪にかただ人になりたまひにければ、故院の御遺言のままに、うち代り、帝ただこの御心に世をまかせきこえさせたまひて、いとあらまほしうめでたき御有様なり。

（巻一・12頁）

「一つ后腹」の長男が一条院、次男が堀川関白、三男が嵯峨院となつてゐる。堀川関白だけが臣籍降下してゐるが、その理由は「何の罪にか」と臆化されているだけで、これ以上の語りはない。この点に關してはあまり立ち入らないが、その罪によつて嵯峨院が皇位を継承できたということは確かである。堀川関白が即位していれば、嵯峨院までに帝位が回つてくることは想定しにくいだろう。平安朝において、「一つ后腹」の三皇子が帝位に着いた例はない。嵯峨院は帝位につけた恩義を堀川関白に感じていたのは十分に想定できよう。だから、「故院の御遺言」にしたがつて、堀川関白に「世をまかせきこえさせ」たのであろうし、その子息に対しても格別に最厚したことになる。

また、その狭衣によつて御世が成り立つてゐるとする思いもあつたようである。天稚御子の手から狭衣を地上に引き留めようとしたのは、その現われであつた。

この人をかく目に見す見す雲のはたてに迷はしては、我が御身もこの世に過ぐさせたまふべき御心地せさせたまねば、涙もえとどめさせたまはず、いとみじき御気色にて引き留めさせたまふを、

（巻一・32〜33頁）

狭衣を失ふことは、「我が御身もこの世に過ぐさせたまふべき御心地」もしないとされ、生きていられそうにもないと感じてゐる。狭衣あつての我が御世という思いなのであり、だから最愛の女二の宮降嫁にも想到してゐる。天稚御子降臨事件は、嵯峨院を震撼させたのであり、これがもう一つの原点となつて、狭衣最厚が増幅したと理解できよう。天稚御子降臨事件の孕む磁場は、嵯峨院ともかかわつてきわめて大きいのである。

嵯峨院としては、狭衣を格別に最眞にすることによって、逆に自分の意向に従うべきだとの思いも存在している。なかなか笛を吹きそうにもない狭衣に、次のように問詰していた。

年ごろ、大臣の思ひたるにも劣らずこそ思へ、かばかりのことをだに言ふままならざりければ、まいてよろづ推し量られぬ。よしよし言はじ。
(巻一・28頁)

嵯峨院は、堀川関白に劣らないほど狭衣に目を掛けているとする自負がある。だから、自分の意向に従つて「かばかりのこと」に過ぎない吹奏をすべきだと言うのである。引き立てているので、その恩義に報いるべきだということになる。こうした発想をするのも、嵯峨院にとつて、狭衣は我が子同然との思いにまでなっていたからである。「大臣の思ひたるにも劣らずこそ思へ」は、繰り返される嵯峨院の思いであり、巻四になつても変わりはない。

いはけなくものせられしより、大殿にもおとらず思ひそめてしを、
(巻四・200頁)

狭衣が、出家の噂は誤聞であることを釈明しに嵯峨野に赴いた際の、嵯峨院の言葉である。こうした嵯峨院の思いは、狭衣自身も常に忝く感じている。

・ 嵯峨の院の、昔より殿の御心ざしに劣らず、あはれにかたじけなかりしをだに、このかたざまには見知らぬやうにてやみにしものを。
(巻三・77頁)

・ 昔より嵯峨の院の御心ざしありがたうおほえたまひしかど、さまざまかひなきやうに御覽せられてやみはべりぬる代りに、
(巻三・145頁)

前者は、一品の宮との婚儀が決定した際の述懐、後者は女一の宮の入内を堀川関白に進言した際の言葉である。両者いずれにも、狭衣が嵯峨院の「御心ざし」を感じている様が言われている。しかし、いずれも狭衣が嵯峨院の降嫁させたい意向を裏切ってきた次第を回想することに続いている。物語は、嵯峨院の狭衣に寄せる思いが語られ、その一方で、その意向を次々と狭衣が裏切っていくという形で展開することになるが、ここでは、ひとまず嵯峨院と狭衣は、強い心的紐帯

で結ばれていることを確認しておきたい。

嵯峨院には、狭衣に寄せる思いがあつたからこそ、皇女たちの降嫁を次々に想到していくが、なぜ降嫁にこだわるのかを押さえておきたい。皇太后宮は、皇女独身主義を標榜しているし、即位した狭衣も飛鳥井の姫君の独身を選択している。それなのに嵯峨院の念頭にあるのは、常に皇女たちの降嫁であつた。

嵯峨院が降嫁を思うのは、皇女たちにしかるべき後見が不在であつたからである。

内裏には、女二の宮の盛りに整はせたまへるを見たてまつらせたまひて、なかなか見たてまつる人なからむも口惜しう見えさせたまふ。母宮の御方様とても、つゆばかり頼もしき人もものしたまはず。 (巻二・130～131頁)

巻二になり、本格的に女二の宮物語が始動する段での嵯峨院の思いである。ここに二例の「…人」表現があるが、前者の「見たてまつる人」は配偶者、後者の「頼もしき人」は親類縁者などの後見人となろう。女二の宮が美しく成人したのを見て、配偶者となる男性がいないことを残念に思っている。女二の宮の美質を見はやす人としての配偶者が望まれるのであり、そう望むのも、皇太后宮側に「頼もしき人」としての、しかるべき後見人がいないからであつた。独身を通ずしても、「頼もしき人」は必要である。しかし、女二の宮には、現在のところ「見たてまつる人」も「頼もしき人」も不在である。この不在を解消する手立ては、降嫁が最も適切である。降嫁すれば、「見たてまつる人」が、「頼もしき人」の役を兼ねてくれよう。そして、その相手として、狭衣は理想的なのであつた。

帝は、なほ、かの宮の御後見に大将をのたまはせ契りてしかば、「うちうちにも、もしさやうにやほのめかす」とおぼしめせど、音なきは、「もの憂きことや」とおぼしめせば、その後は御気色もなけれど、殿に御対面のついでに、「かの笛の祿はすげなげなんめりと見れど、世もいとほかなくのみおほゆるに、頼もしき人なかんめる有様の心苦しきを、また誰にかはとおほゆれば、ただ知らず顔に預けてむとなむ思ひなりぬる」とのたまはするを、(巻二・131～132頁)

先の引用からすぐ後の段である。引用冒頭部の、「かの宮の御後見に大将をのたまはせ契りてしかば」は、巻一の笛の恩

賞として女二の宮降嫁を狭衣に示唆したことを指しているが、それ以降、この問題は宙ずりにされていた。ここで、嵯峨院は、「かの宮の御後見」という形で、配偶者としての狭衣を指示しているが、これは、「見たてまつる人」と「頼もしき人」とを併せた形での把握となる。「頼もしき人なかんめる有様」とされる女二の宮に庶幾されるのは、こうした「御後見」なのであった。嵯峨院は、狭衣の意向がはっきりしないので、「ただ知らず顔に預けてむ」と思案しているが、「預ける」ことも降嫁を意味しているのである。「預ける」「譲る」、あるいは、「御後見」「思ひうしろみむ」などは、降嫁や降下の意味で嵯峨院の皇女や若宮の処遇にかかるキーワードとして機能していくことになる。

右の引用は、女二の宮に関してのものであったが、降嫁させて「御後見」を設けたいとするのは、女一の宮や女三の宮に対しても、女二の宮の出家以後に繰り返されていく。こうした嵯峨院の思いが物語を展開させていく動因の一つになるが、この点はさらに章を改めてみていきたい。以上、嵯峨院の狭衣最貞と皇女降嫁がセットになって語られていた次第を見てきたことになる。

三 斎王制度と皇女たち

女一の宮が斎院になっていた関係で、まず美しく成人した女二の宮の降嫁が日程に上ったが、実現する前に狭衣の密通によって出家し、挫折してしまった。しかし、嵯峨院の皇女たちに寄せる降嫁させたい意向は変わらない。また、嵯峨院には、皇太后宮の子として出生した若宮の処遇も考えなくてはならなくなっている。以後の物語展開は、この若宮と残された女一の宮・女三の宮との処遇が抱き合わせの関係で語られていくことになる。若宮は、狭衣・女二の宮との隠された親子関係だけでなく、女一の宮・女三の宮と「同母姉弟」の関係として語られていくのである。姉宮たちと同じく、若宮も後見人が不在なのであった。

出家した女二の宮に替わって、女三の宮への降嫁が画策されていくが、その様子から簡単にみていきたい。嵯峨院は、若宮の五十日の祝の時点で、早くも女三の宮の降嫁を思案していた。

かく様ことにめづらしき御有様なれば、いとあはれなる私物におぼしめすも、我が御世も今日明日とのみうしろめたくおぼえさせたまふには、この御方様と見置かせたまふべきよすがもなく、心細き御有様なるを、「二の宮おぼしおきてし有様にて、大将にうち具してものしたまはましかば、やがて譲らせたまひてまし」など、返す返す口惜しきことを嘆かせたまひて、「三の宮の御事をやなほさやうにも言はまし」などぞ、懲りずまにおぼし寄りける。

(卷二・213～214頁)

出生した若宮を「私物」と思い、鍾愛の念を禁じ得ないが、「この御方様と見置かせたまふべきよすがもなく、心細き御有様」であることが心配のたねである。だから、もし女二の宮が出家していなかったら、若宮もろとも狭衣に「譲らせ」たのにと無念に思っている。そこで想到したのが、「三の宮の御事をやなほさやうにも言はまし」であった。女三の宮を狭衣に降嫁させ、若宮も同時に預かつて欲しいということであり、「懲りずま」の思いであった。若宮が出生したことによって、その処遇方が問題となり、皇女たちの行末とともに案じられるのである。若宮と皇女たちがセットになって語られる仕組もここに明白であろう。

以下の物語展開は、嵯峨院の不例、讓位の決意と堀川関白への遺言、讓位と出家という次第になっている。堀川関白への遺言では、「大将に若宮を（女三の宮）もろともにも思ひうしろむべき様になむ預けむ」（卷二・219頁）との意向が正式に伝えられ、堀川関白も狭衣の氣持を忖度しないで承引してしまう。しかし、讓位後すぐに出家する事態となり、降嫁は延引される。そして、新帝後一条帝の父一条院の崩御によって事態は転換することになる。

皇太后宮の齋院の御代りには、一条院の後宮の姫宮ぞ居させたまひにしが、大膳に渡らせたまひにしを、還らせたまひて、齋宮もおりさせたまひぬる代りに、居させたまふべき女宮たち、このごろおはしまさざりけり。「源氏の宮の

御内裏参りやいかなるべきことにか」と、世の人々やうやう言ひ出づるを、殿にも聞かせたまひて、「あなあぢきなや。まだ二葉よりただ人にならせたまひにしかば、今さらに神も公も知りきこえさせたまふべきにあらず」とて、おぼしもかけたらず。候ふ人々も、内裏わたりの今めかしさを、いつしかと心もとながり思ふべし。(巻二・227、228頁)

ここで新たに提示されたのが、讓位に伴つて齋院が交替し、嵯峨院女一の宮が退下した替わりに、一条院の後宮の姫宮(二品の宮)が卜定されていたことである。また、一条院の崩御で齋宮も退下したとされるが、すでに指摘されているように、交替する制度的必然性はない。これは、齋院と齋宮とともに空白にし、齋院に源氏の宮、齋宮に女三の宮を当てていくための措置となる。女三の宮が齋宮になることはこの後に語られている(巻二・231頁)。

齋院・齋宮の交替は、ここで女一の宮と女三の宮の立場が転換されたことを意味する。これまで齋院であった女一の宮が俗世に戻り、降嫁が予定されていた女三の宮が神域に奉仕することになるからである。齋王制度をやや無理があるものの、巧みに使用した登場人物の入れ替えとなろう。降嫁すべき皇女が、女三の宮から女一の宮に転換されたのである。

この転換は、すぐさま明らかになる。源氏の宮の齋院入りにつけても狭衣が「ひとり住み」でいることを案じた堀川の上は、次のように狭衣に提案していた。

「…かばかりになりぬる人(狭衣)の、かうものはかなくただよひたるやはあるとよ。…三の宮の御事の口惜しき代りに、前齋院はいかがおぼすらむ」とのたまへば、「さのみやうのものと厭はれたてまつらむこそ、世の音聞きも恥づかしう侍るべけれ。あまりやむことなからぬ人は侍りなむや」と申したまへば、(巻二・242頁)

堀川の上は、狭衣がいまだに独身でいることが心配である。女三の宮が齋宮となつて降嫁がなくなつたことを残念に思い、その替わりに前齋院の女一の宮はどうかと言っている。この判断は堀川の上ひとりだけのものではなく、嵯峨院のものでもあった。

入道の宮は嵯峨にのみおはしまして、この若宮の御事もさらに知りきこえさせたまはねば、ただ三の宮のみぞあは

れに思ひきこえさせたまへるを、秋はほかへ渡らせたまひぬべければ、いと心苦しう、「かくては、いかでかおはしまさむ。迎へたてまつりて、殿に預けたてまつりてむ」とのたまふを、「院はなほ、『前齋院のひとり心細くて残りたまへるに、同じくは、さてもやがてものしたまはむは、目やすかりなむかし』となむおぼしたる」と聞こえたまへど、世はいとありがたくのみおぼえまさりたまひて、「いかならむひまにも」と、心ばかりは西の山もとにあくがれ果てにたれば、まいて、いとしもすぐれてと聞かざりし御有様の、やうやう盛り過ぎたまへらむは、さらにゆかしからぬに、

(卷二・243～244頁)

女三の宮はこれまで若宮とともに一条宮に住んで、その面倒をみていたが、齋宮となつたためにそれも出来なくなる。狭衣は若宮だけが心配であり、「迎へたてまつりて、殿に預けたてまつりてむ」との考えを堀川の上に相談している。それに対して、堀川の上は、女三の宮に替わつて、退下した女一の宮が今度は一条宮に住んでいるので、嵯峨院の意向としては、「前齋院のひとり心細くて残りたまへるに、同じくは、さてもやがてものしたまはむは、目やすかりなむかし」だと狭衣に伝えている。嵯峨院は、女一の宮と若宮を二人とも預けたいたのであつた。

物語の路線として、女三の宮と女一の宮が轉換したことは明白であらう。狭衣は、女三の宮に対しては、「かのありし夜目にもしるく、こよなく劣りたまへりしものを」(卷二・220頁)と、女二の宮に格段に劣つていた幼なさを思い、乗り気ではなかつた。女一の宮は逆に、「いとしもすぐれてと聞かざりし御有様の、やうやう盛り過ぎたまへらむ」様と聞いている高齡なので、これにも乗り気になれないでいる。皇女が入れ替つただけで、嵯峨院の意向に変更はなく、狭衣の忌避する心情にも変更はないのである。

事態は一行に進展しないが、嵯峨院の命によつて、動き出すことになる。

まこと、齋宮は寮へ渡りたまひしかば、若宮はいとど人ずくなものさびしうてもしたまふを、大將は心苦しう思ひきこえたまへど、前齋院のひとり住みの心細きにより、嵯峨の院の、「なほさながら思ひうしろみたまへ」とのた

まはすれば、大殿へもえ渡しきこえたまはで、常にみづから渡りたまふ。

(巻三・15頁)

若宮と女一の宮の処遇を決断した嵯峨院は、「なほさながら思ひうしろみたまへ」と狭衣に命じている。しかし、狭衣は、若宮を預かることに異存はないものの、女一の宮まで預かる気にはなれない。そこで、狭衣の選択した判断は、「常にみづから渡りたまふ」であつた。

女一の宮を預かるということは、その境遇からいつて狭衣の住む邸に迎えることである。一条宮には、狭衣との結婚生活を手援助する縁者は不在であつた。それを見越して、嵯峨院は女一の宮と若宮を預かれと命じたのである。しかし、狭衣は自身が一条宮に出向くことで応じている。これは、女一の宮を預かることを留保し、若宮だけを預かつたことの表明となる。嵯峨院の意向は、半分だけしか実現していないのであり、狭衣としては、これで十分なのであつた。

意向に反したこの事態は、嵯峨院も了解せざるを得ないでいる。後一条帝が若宮を自身の養子としたいとの意向を漏らしたのを聞いた嵯峨院は次のように論じていた。

齋院の御扱ひにとおぼしてこそ譲りきこえしか。その本意違ひにしかば、今はげにさらでもありぬべかりしかど、
いづれの御ためにもありがたき心のほどを、今はと改めむも軽々しきやうにぞありぬべき。

(巻三・144頁)

嵯峨院は、女一の宮に若宮の面倒をみてもらうために、若宮を狭衣に譲つたのだという。これは、集成本が指摘するよ
うに、「女一の宮と狭衣の結婚を前提としての考え方」である。しかし、その前提が崩れているので、若宮を預けておく理
由もないとしているが、女一の宮と若宮の二人に対し、狭衣は「ありがたき心のほど」を見せているので、軽々しく養子
縁組を解消せず、このままでいいとの判断をしている。狭衣の戦略に従わざるを得なかつたのである。

嵯峨院の、皇子と皇女とともに降下させようと繰り返し思念するのは、極めて特異である。皇女の降嫁となれば、その
先蹤として『源氏物語』の朱雀院とその女三の宮の場合があつた。朱雀院は、後見のない幼い皇女の行末を案じて降嫁さ
せたのだが、『狭衣物語』の女三の宮や女一の宮の場合は、その事情とは相違していよう。常に若宮の処遇と抱き合わせの

関係で思案され、二人の皇女に繰り返し適応させようとしている。内実は、二人であつても齋王制度の援用によって、語られるのはどちらか一人であるという仕組になるが、嵯峨院の狭衣鼯肩が原因しているとは言え、特異な物語展開として注意されるのである。

四 一品の宮物語との連繫

狭衣は嵯峨院の意向を裏切っていることになるが、それが一品の宮の物語と関連していくことになる。狭衣と一品の宮が噂になっていると聞いた内侍の乳母は、次のように思っていたとされる。

嵯峨の院の、宮たちをうちかはり預けさせたまへど、聞き入れたまはぬに、まいて盛り過ぎさせたまひぬ、あな恥づかし。おほろげの人見えたまふべくやは。
(卷三・68頁)

嵯峨院の意向を無視して、皇女を何とも思わないとする狭衣像が、一品の宮側で問題にされ、一品の宮の盛り過ぎた年齢が危惧されている。狭衣自身も、意向を無視していることは感じるところでもあり、先に引用したように、一品の宮との婚儀に際して負目にも思っていた。

嵯峨の院の、昔より殿の御心ざしに劣らず、あはれにかたじけなかりしをだに、このかたさまには見知らぬやうにてやみにしものを。げに、その折は思ふ心ひとつによりてぞかし。
(卷三・77頁)

狭衣は繰り返し嵯峨院の意向を無視してきたので、一品の宮との婚儀などあつていいものかと後悔している。こうした後悔の所在は、嵯峨院に対する負目となり、また、若宮を関白邸に移したことによる女一の宮のつれづれを懇切に見舞うことにもなる。そして、同じことなら、一品の宮ではなく、女一の宮との結婚をすればよかつたとの後悔をもたらしている。

前斎院の御つれづれも心苦しう、大將はおしはかりきこえさせたまへば、いとねんごろに参りつかうまつりたまへば、御後見たちも、まめやかにありがたかりける御心かなと、うれしう見聞こゆるにつけても、「なか、今すこし思ひなき仲らひにても見扱ひきこえたまふまじき」と思ひけり。
(卷三・117頁)

こうした後悔の所在は、「後悔しき」狭衣像を象るとともに、一品の宮物語と連繋させることによつて、その運命と嵯峨院皇女たちを対照化し、それぞれのありようを相對化していることになる。独身主義を通したり、不本意な結婚や理想的な結婚をしたり、齋王として神に奉仕する身となつたり、という具合に皇女たちの運命も様々である。そして、狭衣の嵯峨院や女一の宮に対する負目が、女一の宮を堀川関白の養女として入内させるといふ形で、新たな展開を見せることになる。さらに章を改めることにしたい。

五 女一の宮の入内

この節から、養女論になる。女一の宮が堀川関白の養女となり、入内する様は次のように語られている。

(後一条帝に) 男皇子のおはしまさぬことを世の人ども心もなきことに言ひ思ひて、女ども持ちたまへる人などは参らせ、集めたまふを、大殿はいとうらやましう、いまさらに、「かかる人のすくなうおはしけること」と嘆きたまへば、大將は前斎院の御事を聞こえ出でたまひて、^③「昔より嵯峨の院の御心ざしありがたうおほえたまひしかど、さまざまかひなきやうに御覽せられてやみはべりぬる代りに、同じうは、さやうにても、かひなかりける心のほどを見えたてまつらまほしう」など聞こえたまふを、げに若宮の御有様などを見たてまつりたまふにも、^④「ありがたき御心ばへぞかし」と、かかる御おとな心をうつくしう思ひきこえたまへば、^⑤「我もいとつれづれなるに、斎院のさておはしましたと思ひなして扱ひきこえむ」とのたまひて、嵯峨の院にも、「かやうになむ大將のすすめはべる」など聞こえさせたま

ふを、いかでかおろかにおぼしよろこばむ。御後見なくては、さやうの御まじらひあるべきならねば、よろづ心苦し
く見おききこえさせたまへるを、かうまで思ひよりたまはむ大将の御心ぞ行末までいと頼もしくおぼしめさるる。

⑧ 心ゆかざりつる御後見どもも、「かかる心にて、けざやかにて過ぐしたまふにこそ。入道の宮の思はずにならせたま
ひしに、とりつき喜び顔に、同じ枝のゆかりに木伝ひては見えたてまつらじと、心深うおぼすにこそありけれ」と、
⑨ 心ゆきたる人多かり。

みづからの御心にこそ、「年ごろ罪深きさまなりつるを、いかで」とおぼしつる本意深けれど、よき人の御身はなか
なかよろづまかせがたかりければ、心より外にて参りたまひぬ。御局は、やがて昔の弘徽殿なり。

帝もかねては、「大将の思ひ放ちたまへる親心もいかなるにか」と人わろくおぼしめされしかど、さはいへど、な
べてならず、心にくき御有様などはことにすぐれたまへれば、いとやむごとなくあらまほしき御覚えなり。

嵯峨の院にも、ただ大殿に、まかせきこえたまへれば、まことの御むすめのやうに扱ひきこえたまへり。

(卷三・144〜146頁)

点線部が、狭衣自身も女一の宮の後見役となり入内させようと提案する次第である。傍線部⑤は堀河関白が養女とする
ことに納得している様になる。堀河関白の養女としての女一の宮の入内は、本人を除いて八方に都合がよかつたことが窺
われよう。この点を物語の記述に沿って見ていきたい。

① 男皇子のいない後一条帝には、新たに入内してくる女性が多いとは言え、堀河関白が後見となる女一の宮に優る人は
いず、理想的な入内となる。また、皇子の誕生も期待されよう。

狭衣にとつては、③「昔より嵯峨の院の御心ざしありがたうおぼえたまひしかど、さまざまかひなきやうに御覽せられ
てやみはべりぬる代りに」と堀河関白に進言しているように、嵯峨院に対する負目を償うことになる。そして、これ以
後の嵯峨院皇女たちとの交渉を、女二の宮を除いて閉塞させることに機能していく。嵯峨院の意向に沿って展開した狭衣

に対する皇女処遇の問題は、これで落着いたのである。

提案された堀川閔白には、②后がねとなる子女が少なかったので、こうした提言をする狭衣の④「ありがたき御心はへ」を嬉しく思っている。また、⑤「我もいとつれづれなるに、齋院のさておはしましと思ひなして扱ひきこえむ」と賛意を表わしているように、源氏の宮の齋院入り後の所在なさを、養女の世話で慰められるのは、嬉しいことになる。これは、洞院の上が養女養育でつれづれを慰めようとしたことと同じ位相である。その養女は、后がねになるのであり、後一条帝との姻戚関係が形成される。入内できる女子のいない堀川閔白に、外戚となる道が開かれたのである。

嵯峨院にとつても、堀川閔白が養父となるのは理想的な女一の宮の「御後見」になり、⑥嬉しさはひとしおである。理想的な養父ができたことで入内が可能となっているのであり、単なる降嫁にまさる処遇になる。また、そうであることによって、ここまで思いついた狭衣に対して、⑦「かうまで思ひよりたまはむ大將の御心ぞ行末までいと頼もしくおぼしめさるる」と思うようになっていく。狭衣への隠された恨みも解消したことになる。

⑧「心ゆかざりつる御後見ども」とされる女一の宮の女房たちも、ひとり住みの寂しさどころではない、歓迎すべき事態となる。また、この事態を企図した狭衣への評価も、⑨格段と上がっている。

女一の宮だけは、⑩「年ごろ罪深きさまなりつるを、いかでとおぼしつる本意」が実現しないので、⑪「心の外」の事態である。長く神域に仕えていたので、仏教から遠ざかっていた罪を償うべく、出家したかったからである。しかし、「心より外」とは言え、弘徽殿に入御している。

こうして、女一の宮を正式に迎えた後一条帝は、⑫「心にくき御有様などはことにすぐれたまへれば、いとやむごとなくあらまほしき御覚えなり」とされ、その人柄から限らない寵愛ぶりとなっている。この後に、立后する伏線ともなっていく。

嵯峨院は、すっかり堀川閔白に、⑬「まかせきこえたまへれば」とされているが、これは絶大なる安心の様である。任

された堀川閔白の方も、⑭「まことの御むすめのやうに扱ひきこえたまへり」とされ、その世話に余念がないのは、嬉しいことなのである。養女が「まことの御むすめのやう」でいられる幸運も表現されていよう。嵯峨院の意向は、形を変えて理想的に決着したのである。

引用部からは以上のように整理できるが、この一件は狭衣にはさらに正負両様に働く意味が生じている。正の方は、若宮と住めるようになったことである。若宮は堀川閔白邸にすることも多かつたが、基本的には、女一の宮とともに一条宮を住まいとしていた。しかし、女一の宮の入内によって若宮は一人住むことになるので、後見という大義名分によって引き取れるのである。女一の宮の入内は、若宮の物語ともかわつていたのであり、けだしそれは当然のことでもあつた。負の方は、先の引用部に続く場面で暗示されているが、女一の宮が弘徽殿に入御したことによって、女二の宮に対する自責の念をいや増しにさせ、贖罪の意識をもたらしめていることである。この物語で「弘徽殿」は、女二の宮との密通の場になったことよつて、密通の罪を喚起する記号となつていた。自責の念は、この後、女二の宮の法華八講の場に連接することよつてさらに高まり、卷三末の出家行に展開することになる。

女一の宮は、こうして堀川閔白の養女として入内したわけであつたが、ここで注意しておきたいのは、入内案が先行していたことである。入内させるための方策として養女が考えられたのであり、これは「養女縁組即入内」というケースになる。狭衣が後一条帝の養子となつてから即位したのと同じ位相である。将来の入内を予測して養女にする、「入内目的の養女」という発想は、これまで指摘してきたように『狭衣物語』には不在とすべきであらう。

六 その後の女一の宮

入内してまもなく女一の宮は懷妊し（巻三・148頁）、「大殿、大将なども、かひがひしき御有様をうれしくおぼしけり」（巻三・149頁）とされ、養女の世話に喜びを見出している様が語られている。出産準備のため、実家となる堀川関白邸に退出することは巻四になっての話題となる。退出してからは、同じく養女である源氏の宮との交渉の様子が語られるが、そこから物語は宮の姫君物語にゆるやかに転回している。堀川関白邸にいる女一の宮は、源氏の宮にあり得たかも知れない幸運の所存を暗示しよう。

出産したのは女宮であったが、「よろづ大殿、大将などもてはやしかづききこえさせたまへる有様なのめならねば、思ふさまならぬ御事とも見えず、めでたき御宿世とのみ見ゆ」（巻四・228頁）とされている。「大殿、大将」の世話振りは相変わらずであり、そのために「めでたき御宿世」である。さらに立后することになり、その準備のために「やがて堀川の院に出でたまひぬ」とされる。養女となった幸運を女一の宮は提示しているのである。

こうした幸運振りは、一方で女二の宮の悲運を浮かびあがらせている。齋院に赴いての狭衣の思いである。

「何事もこの（女一の宮の）御有様は、こよなう（女二の宮に）劣りたまへりしだに、かやうになのめならぬ様にもてなされたまひけるものを」とおぼすに、わが過ちの心苦しきもおろかならずおぼし知るべし。（巻四・210～211頁）劣っていた女一の宮が幸運を掴み、優っていた女二の宮が出家の身でいると思うと、狭衣は今更ながら自身の過ちを償い難く思っている。嵯峨院皇女の幸運と悲運が鮮やかに対照化され、また自責の念は、狭衣に将来にわたって揺曳されることも暗示されている。

後一条帝が讓位し、狭衣が即位した時点で、女一の宮は後一条院とともに後院の一条院に二人だけで住むようになったと思われる。それは、堀川関白邸に女一の宮の居場所が語られていないことから想像できる。

この院（堀川関白邸）には、一品の宮（飛鳥井の姫君）のおはしまし所をぞ、返す返す磨きたてて、朝夕の営みには、この（若宮と）二所の御事をおぼしめしたり。
（巻四・355頁）

狭衣即位によって「院」となった堀川関白邸では、飛鳥井の姫君と若宮（兵部卿宮）の世話に余念がないとされていて、女一の宮の影はない。その存在が忘れられたのではなく、一条院に移御して不在なのである。退位した帝が、最愛の后とたった二人で、「ただ人」のように住むことは、理想性の表現となる。「源氏物語」の帝たちも、そのように晩年を過ごしていた⁽³⁾。女一の宮の幸運を思うべきであろう。

おわりに

嵯峨院の女三の宮の将来は、齋宮となったことで未定のまま物語は終焉している。しかし、女三の宮に当初考えられた処遇案が、女一の宮に転換されたことで、物語は多様な陰影や対照性をもたらしていた。一品の宮とともに結婚適齢期を過ぎた皇女として設定されながらも、二人の運命は対照的であった。また、源氏の宮にあり得たかも知れない養女の幸運も女一の宮に託されていたとも言えよう。この幸運は、女二の宮の出家姿を照射するものでもあり、狭衣に多様な感懐をもたらししていた。嵯峨院の皇女たちは、父院の意向が大きく働らく形で、若宮とともに語られながら、物語展開に有機的に絡んでいたのである。嵯峨院に、降下や降嫁という形で我が子たちの処遇を発想させたことで、養子女のありようも必然的に追求され、養女の物語としての一環を担ったことになる。

注

(1) 拙稿「源氏の宮の養女性をめぐる」(『古代文学研究 第二次』11、二〇〇二年一〇月)、「狭衣物語」の今姫君の養女性をめぐる

- て」〔大妻女子大学紀要―文系―〕35、二〇〇三年三月、「狭衣と若宮をめぐる―預かり」と若宮即位への道筋」〔大妻国文〕33、二〇〇二年三月)、「狭衣物語」の若宮をめぐる―『源氏物語』引用からの創造」〔論叢狭衣物語3 引用と想像力〕新典社、二〇〇二年五月)、「飛鳥井の姫君の位置づけ」〔大妻国文〕31、二〇〇〇年三月)。
- (2) 拙著『狭衣の恋』(翰林書房、一九九九年二月)。
- (3) 拙稿「『鈴虫』巻の位置づけをめぐる」〔紫の上造型論〕新典社、一九八八年六月)。